グッドデザイン、キッズデザインをダブル受賞

スタイルやブランドを重視「こういう家が欲しかった」と言われるように

ポラスグループで分譲住宅事業を展開するポラスマイホームプラザ。グッドデザイン賞、キッズデザイン賞を相次いで受賞するなど高い評価を受ける。設計担当の内野氏と塚原氏に家づくり・まちづくりへの思いを聞いた。

設計課 課長
内野貴通氏

設計課 営業企画設計係 主任
塚原俊紀氏

――2021年は、キッズデザイン賞とグッドデザイン賞のダブル受賞となりました。

内野　ポラスマイホームプラザとしてキッズデザイン賞は2年連続、グッドデザイン賞は初の受賞となりました。ポラスグループのブランディング戦略として、これらに積極的に取り組んでいます。何かしらの価値を生まなければ受賞することはできません。企画や設計を創り込むことで商品がよくなり、お客様に喜んでいただけます。また、選考過程ではプレゼンテーションが重要ですが、お客様に対して商品の特徴や魅力をしっかりと伝えるスキル、どのように伝えようかという思考が、さらに高まったとも感じています。

今回、特に嬉しかったのは、3棟、7棟といった一般的な物件で受賞できたことで、しっかりと考えれば受賞できるのだと自信につながりました。

――商品づくりでは7つのブランドを展開していますね。

内野　インダストリアルデザインの「リブ マイスタイル イズム」、木に包まれるような「フォレストレ」、伝統的な「トラディバイス」、都市型デザインの「デュクス」、和モダンの「ワトキ」。そして今回、グッドデザイン賞を受賞したシンプルモダンの「B／N」と、キッズデザイン賞を受賞した「育実（はぐくみ）の丘」です。

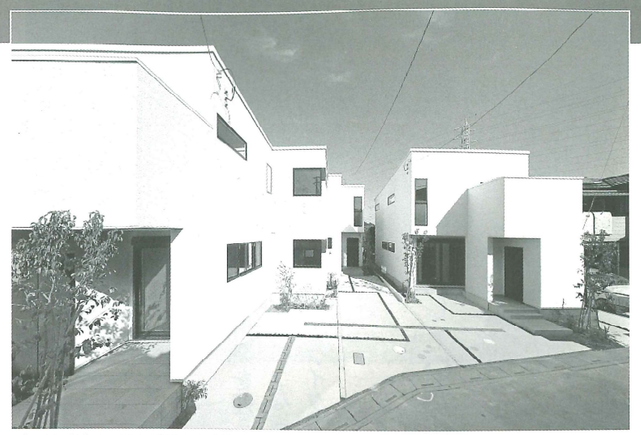
2019年頃からブランディングに取組み、2020年に形にしました。シリーズ商品は、お客様にしっかりとコンセプトを伝えることが狙いです。趣味や趣向など多様化するニーズを汲み取り、「こういう家が欲しかった」と言っていただけるような商品を提供していきたいと考えています。

デザイン面では、特に外観と内観のトータルデザインに重きを置いています。また、スペックにもこだわり、全棟で許容応力度計算を行い、耐震等級3をクリアすることを第三者機関の評価を得ています。また、長期優良住宅の認定取得も積極的に行っています。60年保証も大きな特徴です。

――グッドデザイン賞はB／Nの2作品が受賞となりました。

内野　塚原は以前、注文住宅を手掛けており、その良さを分譲住宅に生かしたいと「B／N」を立ち上げました。初めて形にしたのが7棟の「B／N上尾」（2020年12月販売開始）と、3棟の「B／N大和田」（同2021年1月）です。ともにB／Nのコンセプトをストレートに表現しており、上尾の「暮らしを整える家」、大和田の「家の中のノマドワーカー」の2つで受賞することができました。

塚原　「大和田」は「バックヤード」を一つの核とし、収納を一カ所に集中させました。適材適所に分散させる収納では、モノの形や量の変化に対応できません。このバックヤードに隣接して「マルチカウンター」を設けました。シンプルな2枚のカウンターでは、パソコンで仕事をしたり、読書をしたりする場所としてだけでなく、好きなものを飾ったりと色々なコトの変化に対応できます。これらはリビングを広く使うことが狙いです。水回りを2階に持っていき、一階は23畳の広いリビングとしました。コロナ禍で家にいる人、時間が増えるなか色々な居場所を設けることを狙いに、自然体で、居心地の良い暮らしをしてほしい、住まいは暮らしを整える〝器〟であるという思いを込め「暮らしを整える家」というネーミングとしました。



グッドデザイン賞を受賞した"暮らしを整える器"との思いを込めた「B／N大和田」

一方、「上尾」では、様々な居場所のある在宅ワークをテーマにしています。コロナ禍に在宅で仕事をするとだいたい部屋にこもりがち。そのように家の中に仕事が入ると、空間が分断され生活の場が削られてしまいます。一定の職場を持たず色々な所で仕事をするノマドワーカーのように、仕事と生活を分けず家全体を自由に使おうという発想で、色々な場所に気持ちの良い居場所を作りました。例えば、様々なことが違和感なくできているカフェのようなダイニングテーブルを造付け、こもり感のあるネットカフェから連想してヌックをリビングに隣接させてつくりました。これからは生活と仕事がもう少し密接にからみあって共存できるような暮らしが必要なのではないかと考えています。

――一方、キッズデザイン賞は、「育実の丘」で2つの受賞となりました。

内野　「育実の丘」は、ポラスマイホームプラザが昔から継続して取り組んでいる子育て支援のシリーズです。今回のキッズデザイン賞では、家族のロッカーをテーマとする「ファミリーステーション」と「ツリーハウスのような秘密基地」の2つを、「浦和美園」52期で受賞しました。

「ファミリーステーション」は、大人も子供も使える収納で、ハンガー掛けを可動式として高さを変えられるようにしています。また、家族のコミュニケーションの場としても考えており、例えば、子供の工作や思い出の手紙をクリップでつけられるような工夫もしています。「浦和美園」52期の全31棟で導入しています。

塚原　浦和美園の31棟現場は、元々は屋敷林に囲まれた一軒の家でした。これらの木を伐採して新たな住宅地として生まれ変わるということで、木を生かしたいと考えました。また、コロナ禍で子供たちがなかなか外で遊べないこともあり、家の中に木と触れ合うことができる秘密基地のようなものをつくれないかと考えました。ワクワクするような空間を作りたかったのです。階段の途中の中2階に空間を設けたもので、5畳くらいありますから収納などに使うこともできます。

――これからの家づくり・まちづくりのテーマ、ポイントは？

内野　今、世の中の大きなテーマは脱炭素です。ポラスマイホームプラザでは長期優良住宅やロングライフサポートなど進めてきており、持続可能性、環境配慮などのSDGsのような展開に取り組んでいきたいと考えています。

また、IoTやAIなどデジタル化が急速に進むなか、住宅でも対応していかなくてはならないと考えています。ただ、設備等は非常に大切だとは思いますが、短期間で進化しますし、取り替えが可能なものでもあります。やはり、変えられない部分のスタイルやブランドを重視していきたいと考えています。